

全学共通科目の現状と課題

——各種アンケート調査の結果から——

高等教育開発センター教授 たけだ げんゆう
武田 元有

はじめに

平成 3 (1991) 年の大学設置基準の改正によって一般教育・専門教育の課程編成は各大学の裁量に委ねられることになったが、鳥取大学の場合は平成 7 (1995) 年 3 月に教養部を廃止し、学部所属の教員も教養教育に従事する一方(全学出動体制)、新設の大学教育センター(当時)が教養教育の授業計画を調整することになった。以後、大学教育をとりまく環境の変化に対応するため、教養教育に関するカリキュラム・運営体制は定期的に刷新され、主な改革として、①平成 13 (2001) 年度の改革：主題科目の導入、②平成 21 (2009) 年度の改革：基幹科目の導入、③平成 29 (2017) 年度の改革：基幹科目の人文社会における選択必修の導入、が行われてきた。最近では第 4 期中期計画期間(令和 4：2022～令和 9：2027 年度)の開始に伴い、「鳥取大学ビジョン 2030」に基づく教養教育＝全学共通科目の見直しが検討されている。

ところで全学共通科目の改革が俎上にあがる以前より、既にあらゆる角度から教養教育に関するアンケート調査が実施されている。だがこれまでその調査結果は十分に検討・分析されて

表 1：各種アンケートの概要 (回収率は 1 は令和 3 年度、その他は直近のもの)

	名称・開始時期	調査対象	質問内容	実施組織	頻度	方式	回収率
1	授業アンケート	受講生	教養・専門	高等教育開発センター	毎学期 (4回)	Web	18,381件 67.6%
2	学生生活実態調査 2009年～	在学生 (4学年)	生活・課外 (教育を含む)	学生部生活支援課 関連専門委員会	2年毎	Web	2,069件 42.5%
3	教育力アンケート 2007年～	卒業生 就職先	教育 (主に専門)	高等教育開発センター (+入学・キャリアセンター)	3年毎	Web	443件 13.2%
4	意見交換会 2022年～	在学生 (任意)	教養・専門	高等教育開発センター	毎学期	対面 Web	
5	満足度調査 2022年～	在学生 (2・3年)	教養教育	教養教育センター カリキュラム改革WG	毎年	Web	388件 16.6%
6	米子地区調査 I期：2009年～	医学科 (1-3年)	教育・課外 (教養・専門)	教育センター (共通教育開発部門)	毎年	書面 面談	
	II期：2014年～	3学科 (1・2年)	教養教育	教養教育センター (共通教育+外語部門)	毎学期 (2回)	書面 面談	
7	全国学生調査 2021年～	在学生 (2・4(6)年)	生活・教育	文部科学省	2年毎	Web	220件 8.9%
8	自己点検・評価 2021年～	各部局等 教科集団	全学共通科目	教養教育センター	2年毎	書面	100%

こなかったように思う。そもそも教育課程の改革は、従来の教育体制にいかなる問題があるかを見極め、その弊害を是正するものでなければ、実施する意味はないであろう。以下小稿では各種アンケートの概要を簡単に振り返り、問題の発見と今後の方針検討の一助としたい。

なお以下はあくまで筆者個人の見解で、所属組織の公式見解を代弁するものではない。

1. 授業アンケート

教育活動の基礎資料となる授業アンケートは、本学では平成 9 (1997) 年度に、「分かりやすい教授方法の調査・研究プロジェクト」(座長：道上正規学長特別補佐)の主導で、「授業評価アンケート」として、一部の教官の任意で試行された(概要は、同時に刊行を開始した FD 事業の広報誌『わかりやすい講義をめざして』(1) 1998 年 3 月、所収の細井由彦「授業評価アンケートの結果」)。その後、平成 13 (2001) 年度から「教授方法改善専門委員会」のもとで本格実施となり、平成 15 (2003) 年度より対象科目(担当教員は匿名)の平均値が『わかりやすい講義をめざして』各号巻末、及び公式 HP (URL : <https://www.tottori-u.ac.jp/1924.htm>) で公表されている。なお平成 16 (2004) 年度より「大学教育総合センター」の専任教員が教授方法改善委員会(2007 年 3 月まで存続)の委員長を兼ね、続く平成 26 (2014) 年度から教育センターの「高等教育研究開発部門」が、さらに令和 3 (2021) 年度から現行の「高等教育開発センター」がアンケート業務(様式整備・結果分析)を継承している。また『わかりやすい講義をめざして』は、当初は教育センターが発行を継承したが、17 号(2015 年 3 月)をもって廃刊している(このため、FD 事業に関する考察・記録の媒体として、「教養教育センター」の発行する本誌『大学教育研究年報』の役割は大きい)。

この間、「評価」の文言は査定を想起させるとして削除され、平成 23 (2011) 年度より「授業アンケート」に改称した。またクォーター制の導入に伴い、年間 4 回の実施となった。設問項目は定期的に見直され、以前は教員の授業方法が中心であったが、現在は学生の取り組みも追加され、それぞれ A 群・B 群として編成されている。現行の様式は令和 4 (2022) 年度に採用され、自習時間の設問が復習・予習時間に細分化された。なお回答方法は令和 2 (2020) 年度のコロナ・ウィルスの感染拡大を契機として Web 入力に転換し、集計作業は効率化したものの、回答率は大幅に低下したため、その改善が課題となっている。令和 4 (2022) 年度には全学共通科目の回収率は 70% 近くまで回復したが、書面回収時代の 90% には及ばず、今後十分な回答率を確保できなければ、授業アンケートの資料的な価値が揺らぐ危険もある。

① 科目区分の傾向

令和 3 (2021) 年度の平均を科目区分ごとに見ると、まず教員の授業方法を問う「A 群」の場合、教養科目では、義務的に履修する必修・選択必修の大人数科目(基幹科目)ほど低く、自主的に履修する自由選択の少人数科目(主題科目・キャリア科目)ほど高い。それでも「基幹科目」では選択必修の「人文」分野(哲学・文学・芸術・心理)が全ての科目区分で最大となっている点は注目される。逆に「社会」分野(経済・憲法・政治・歴史)は低く、設問 4「授業の説明は分かりやすいか」は全ての区分で最低であるほか、設問 6「質問・発言を受け付ける姿勢」も低い(コロナ禍でのオンライン授業が影響している可能性はあるが、その点は他の科目区分でも同じだろう)。外国語の平均も、必修の「英語」はより低く、選択式・少人数の

表2：令和3（2021）年度前期・後期 全学共通科目・授業アンケート集計結果（一般講義のみ）

科目区分	入門科目				教養科目								キャリア科目			
	入門ゼミ	情報リテラシー	DS入門	キャリア入門	基礎科目				主題科目							
					人文・選択	社会・選択	人社・自由	自然・選択	自然・必修	人間と文化	人間と科学	人間と環境		健康と生命	世界と地域	教養ゼミ
履修者数	707	1,138	1,041	1,312	1,839	2,228	803	1,513	2,625	555	361	128	468	831	186	101
回答者数	496	842	731	785	1,220	1,338	467	1,035	1,659	371	224	70	28	447	99	54
回答率 (%)	70.2	74.0	70.2	59.8	66.3	60.1	58.2	68.4	63.2	66.8	62.0	54.7	60.7	53.8	53.2	53.5

(A) 授業の内容と進め方

1 目的・概要、自習・評価方法の説明	4.16	4.33	4.07	4.16	4.41	4.22	4.39	4.31	4.28	4.34	4.27	4.29	4.34	4.36	4.41	4.61
2 授業の進行はシラバス通りか	4.24	4.28	4.10	4.03	4.40	4.16	4.23	4.27	4.24	4.30	4.22	4.23	4.27	4.32	4.21	4.46
3 授業の要点は明確に示されたか	4.19	4.31	4.31	4.16	4.39	4.17	4.32	4.31	4.29	4.37	4.26	4.26	4.30	4.36	4.37	4.56
4 授業の説明は分かりやすいか	4.22	4.17	4.34	4.11	4.32	4.03	4.24	4.24	4.13	4.36	4.21	4.36	4.34	4.36	4.35	4.54
5 学生の理解度を把握する工夫	4.15	4.27	4.26	4.05	4.36	4.11	4.30	4.32	4.21	4.36	4.22	4.30	4.29	4.31	4.49	4.65
6 質問・発言を受け付ける姿勢	4.12	4.00	3.50	4.12	4.39	3.98	4.15	4.06	4.11	4.13	4.15	4.53	4.24	4.19	4.66	4.74
7 この授業に対する教員の熱意	4.17	4.03	3.92	4.31	4.49	4.21	4.34	4.24	4.17	4.49	4.37	4.47	4.44	4.43	4.58	4.74
8 全体として有益で満足できるか	4.20	4.18	4.10	4.01	4.27	4.11	4.35	4.23	4.16	4.49	4.22	4.40	4.37	4.40	4.55	4.65
平均	4.18	4.20	4.07	4.12	4.38	4.12	4.29	4.25	4.20	4.36	4.24	4.35	4.32	4.34	4.45	4.62

(B) あなたの取り組み

9 シラバスを積極的に活用したか	3.38	3.34	3.12	3.30	3.50	3.40	3.51	3.47	3.39	3.46	3.34	3.51	3.45	3.60	3.76	3.91
10 授業に集中し質問・発言に努めたか	3.89	3.80	3.59	3.75	3.82	3.73	3.94	3.80	3.79	3.96	3.79	3.93	3.92	3.98	4.32	4.19
11 授業内容を十分理解しているか	4.04	3.86	3.88	3.91	3.90	3.81	3.98	3.94	3.86	4.09	3.87	3.86	4.11	4.19	4.26	4.54
12 授業の到達目標を達成できそうか	4.05	3.90	3.93	3.92	3.93	3.82	3.91	3.97	3.92	4.10	3.96	3.99	4.11	4.15	4.29	4.56
平均	3.84	3.72	3.63	3.72	3.79	3.69	3.84	3.79	3.74	3.90	3.74	3.82	3.90	3.98	4.16	4.30

13 授業1回あたりの平均自習時間：%

① 3時間以上	2.8	2.5	1.8	1.8	2.4	1.5	5.1	1.5	2.4	2.2	1.8	0.0	0.0	2.5	9.1	1.9
② 2時間～3時間	3.0	3.1	1.8	1.5	3.4	3.1	7.5	3.2	6.3	1.6	3.6	2.9	2.1	5.6	10.1	3.7
③ 1時間～2時間	9.7	17.2	12.4	7.0	21.3	14.4	20.8	20.1	30.6	9.4	11.2	11.4	8.8	22.1	26.3	20.4
④ 30分～1時間	25.4	33.5	23.5	25.9	39.4	34.3	34.5	44.5	38.9	36.1	32.6	34.3	31.0	29.8	33.3	20.4
⑤ 30分未満	59.1	43.7	60.5	63.8	33.4	46.7	32.1	30.6	21.8	50.7	50.9	51.4	58.1	40.0	21.2	53.7
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

科目区分	英語						初修外国語						健康 スポ・実技	合計・平均	
	コミュ英 A	コミュ英 B	実践英語 A	実践英語 B	総合 I・II	総合 III・IV	上級英語	ドイツ語	フランス語	中国語	韓国語	スペイン語			ロシア語
履修者数	1,068	1,071	1,083	1,084	1,724	966	13	528	291	1,085	481	335	26		
回答者数	970	919	872	853	975	616	10	353	232	676	350	310	23		
回答率 (%)	90.8	85.8	80.5	78.7	56.6	63.8	76.9	66.9	79.7	62.3	72.8	92.5	88.5		

(A) 授業の内容と進め方

1 目的・概要、自習・評価方法の説明	4.35	4.20	4.31	4.23	4.22	4.26	4.10	4.50	4.55	4.39	4.29	4.27	4.70	4.47	4.30
2 授業の進行はシラバス通りか	4.28	4.13	4.18	4.15	4.13	4.20	4.00	4.33	4.40	4.24	4.25	4.03	4.57	4.21	4.22
3 授業の要点は明確に示されたか	4.30	4.10	4.22	4.16	4.14	4.24	4.20	4.58	4.52	4.39	4.28	4.37	4.70	4.46	4.28
4 授業の説明は分かりやすいか	4.31	3.99	4.16	4.08	4.04	4.19	4.40	4.59	4.53	4.35	4.17	4.29	4.78	4.42	4.21
5 学生の理解度を把握する工夫	4.36	4.19	4.27	4.19	4.14	4.28	4.60	4.59	4.62	4.25	4.26	4.40	4.65	4.38	4.26
6 質問・発言を受け付ける姿勢	4.57	4.35	4.44	4.30	4.24	4.35	4.70	4.54	4.59	4.37	4.34	4.51	4.78	4.43	4.22
7 この授業に対する教員の熱意	4.55	4.31	4.42	4.28	4.26	4.35	4.50	4.57	4.67	4.43	4.36	4.47	4.91	4.58	4.33
8 全体として有益で満足できるか	4.35	4.06	4.22	4.10	4.06	4.15	4.40	4.56	4.57	4.38	4.18	4.32	4.74	4.55	4.23
平均	4.38	4.17	4.28	4.18	4.15	4.25	4.36	4.53	4.56	4.35	4.27	4.33	4.73	4.44	4.26

(B) あなたの取り組み

9 シラバスを積極的に活用したか	3.05	3.19	3.22	3.23	3.14	3.19	3.40	3.41	3.24	3.39	3.27	3.00	3.70	3.37	3.34
10 授業に集中し質問・発言に努めたか	3.97	3.89	3.98	4.00	3.81	3.94	4.20	4.17	4.06	4.02	3.99	3.85	4.39	4.21	3.89
11 授業内容を十分理解しているか	4.00	3.92	3.99	3.96	3.92	3.97	4.40	4.07	3.83	3.99	3.83	3.61	4.04	4.41	3.96
12 授業の到達目標を達成できそうか	3.87	3.86	3.91	3.89	3.87	3.96	4.40	4.10	3.93	3.98	3.80	3.64	4.22	4.35	3.89
平均	3.72	3.71	3.77	3.77	3.68	3.77	4.10	3.94	3.77	3.85	3.72	3.52	4.09	4.08	3.77
13 授業1回あたりの平均自習時間：%															
① 3時間以上	1.9	2.2	1.4	1.9	2.4	1.8	10.0	2.8	0.9	1.3	2.0	1.6	0.0	2.5	2.1
② 2時間～3時間	2.7	3.9	3.1	4.6	5.7	3.7	0.0	3.7	5.6	5.0	6.6	4.8	8.7	1.3	3.8
③ 1時間～2時間	16.3	23.0	18.3	26.8	25.8	20.5	20.0	18.4	34.9	24.3	31.4	26.1	26.1	5.9	19.2
④ 30分～1時間	47.0	46.2	49.1	45.1	41.9	50.2	70.0	53.3	40.9	46.9	46.3	46.5	47.8	14.6	37.8
⑤ 30分未満	32.2	24.7	28.1	21.6	24.1	23.9	0.0	21.8	17.7	22.5	13.7	21.0	17.4	75.6	35.7
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

「初修外国語」はより高い。英語は設問 6「授業の説明は分かりやすいか」が全体的に低いことが懸念される。「健康スポーツ」は必修ながらも全区分の最高値を示す。

次に学生の取り組みを問う「B群」の平均だが、いずれもA群より低い。自費への遠慮もあると思うが、受動的な学習姿勢も示唆している。どの科目区分も設問 9「シラバスを積極的に活用」が最も低く、使えるシラバスの実現には教員側の工夫も必要だろう。多くの科目区分では設問 12「授業の到達目標を達成」が最も高いが、英語では設問 11「授業内容を十分理解」が最も高い。授業は理解したが、試験は不安なのだろうか。また設問 11「質問・発言に努めたか」は、双方向型の「教養ゼミナール」や、予備知識のない「初修外国語」で高い。

また設問 13「自習時間」を見ると、講義形式の入門・主題科目では「30分未満」が最大だが、同じ講義形式でも選択必修の基幹科目では「30分～1時間」が高い。例外的に社会分野は自習時間が短く、このため内容理解が追いつかず、授業方法に関するA群の平均の低下を招いている可能性がある。外国語は英語・初修を問わず「30分～1時間」が最大となっている。異色なのは「実験・実習」（表は省略）で、過半数が「3時間以上」と回答している。自習時間は授業形態に大きく依存し、演習形式（ゼミ・語学）・実験実習など能動的な学習を伴う授業科目ほど長い。だが文部科学省が規定する1単位の要件は合計45時間（毎週3時間）の学習を標準とするから、本来なら、1単位が認定される演習形式（語学・実験）の授業より、2単位が認定される講義形式の授業でこそ、長い自習時間を確保すべきなのである。

② 担当教員・履修学生の傾向

以上は科目区分での集計であるが、次に学部単位での傾向を見よう。令和3（2021）年度・後期の平均を、まず担当教員の所属で整理すると、医学部・機構教員の担当科目がやや高く、地域学部の担当科目が低い。だが全学共通科目の場合、担当教員の所属と受講学生の所属は一致せず、地域学部の担当科目（人文社会・英語）には工学部の受講生が、逆に工学部の開設科目（自然分野）には地域学部の学生も存在する。このため教員の所属単位で見た平均の違いが、教員の授業方法に由来するのか、学生の属性に起因するのか、にわかに判断できない。

そこで次に学生の所属で整理したいが、現行の学務支援システムでは学生の属性に基づくアンケート集計が困難であるため、高等教育開発センター・小林昌博教授に頼んで人文・社会及び自然分野それぞれの平均を学生の属性で整理してもらった。それによると、「人文・社会」の平均は工学部が最も低く、とくに設問 8「全体的な満足度」が低い。ちなみに不合格率も工学部で最低である。人文・社会は、高校教育・受験勉強の段階で予備知識が劣る理系にとって不利であることを示している。だが設問 8は理系である農学部で、A群の平均も理系である医学部でそれぞれ最大、またB群の平均は逆に文系であるはずの地域学部で最低となっている。これに対して「自然分野」の平均を見ると、文系の地域学部が医学部に次いで高く、理系の工学部が最低、農学部も下から2位となっている。これらを見る限り予備知識の有無は必ずしも満足度・理解度に直結せず、むしろ米子移転のために単位取得に必死な医学部は人文社会・自然を問わず4学部で首位、逆に工学部は受講科目が専門と関係あろうと無かろうと4学部で最低、地域・農学部は落第への不安なのか専門外の分野に熱心な印象がある。

なお授業アンケートの調査対象は湖山地区に限定されているが、今後米子地区でも同様なアンケートが実施されれば、大学としての組織的な実態把握・改善対策の展開が期待される。

表3：令和3（2021）年度・後期 授業アンケート結果（一般講義のみ）

①教員所属別（学部は教員の所属）

全学共通		機構	地域	医学部	工学部	農学部	全体
開設コマ		171	22	9	21	11	241
履修者数		6,309	1,644	341	1,444	690	10,602
回答者数		4,385	881	225	865	416	6,884
回答率		69.5%	53.6%	66.0%	59.9%	60.3%	64.9%
(A) 授業の内容と進め方							
設問1	目的・概要、自習・評価方法の説明	4.30	4.24	4.36	4.30	4.28	4.29
設問2	授業の進行はシラバス通りか	4.19	4.20	4.13	4.28	4.26	4.21
設問3	授業の要点は明確に示されたか	4.26	4.22	4.37	4.29	4.25	4.26
設問4	授業の説明は分かりやすいか	4.18	4.18	4.34	4.18	4.22	4.19
設問5	学生の理解度を把握する工夫	4.27	4.21	4.35	4.29	4.22	4.26
設問6	質問・発言を受け付ける姿勢	4.36	4.09	4.27	4.09	4.18	4.28
設問7	この授業に対する教員の熱意	4.38	4.25	4.39	4.16	4.25	4.33
設問8	全体として有益で満足できるか	4.21	4.21	4.37	4.16	4.20	4.21
平均		4.27	4.20	4.32	4.22	4.23	4.25
(B) あなたの取り組み							
設問9	シラバスを積極的に活用したか	3.33	3.47	3.46	3.49	3.60	3.39
設問10	授業に集中し、質問・発言に努めたか	3.97	3.79	4.08	3.83	3.92	3.93
設問11	授業内容を十分理解しているか	3.96	3.96	4.25	3.91	3.94	3.96
設問12	授業の到達目標を達成できそうか	3.94	3.94	4.15	3.94	3.98	3.95
平均		3.80	3.79	3.98	3.79	3.86	3.81

②学生所属別（学部は学生の所属）

	人文・社会分野（選択必修）					自然分野				
	地域	医学部	工学部	農学部	全体	地域	医学部	工学部	農学部	全体
履修者	322	182	1,066	497	2,067					
合格率	82.0	92.9	81.9	83.9	83.4					
(A) 授業の内容と進め方										
設問1	4.30	4.30	4.22	4.25	4.25	4.36	4.51	4.28	4.29	4.30
設問2	4.23	4.17	4.20	4.23	4.21	4.49	4.37	4.23	4.30	4.27
設問3	4.25	4.27	4.19	4.21	4.21	4.27	4.58	4.28	4.25	4.29
設問4	4.12	4.22	4.11	4.05	4.11	4.18	4.59	4.13	4.17	4.17
設問5	4.24	4.26	4.15	4.24	4.20	4.37	4.52	4.22	4.31	4.26
設問6	4.09	4.24	4.12	4.16	4.14	4.09	4.24	4.10	4.05	4.10
設問7	4.22	4.37	4.21	4.25	4.24	4.28	4.39	4.14	4.18	4.17
設問8	4.16	4.19	4.06	4.20	4.13	4.12	4.46	4.13	4.21	4.16
平均	4.20	4.25	4.16	4.20	4.19	4.27	4.46	4.19	4.22	4.21
(B) あなたの取り組み										
設問9	3.38	3.33	3.42	3.67	3.47	3.70	3.48	3.43	3.69	3.50
設問10	3.64	3.83	3.74	3.80	3.74	3.79	3.97	3.80	3.90	3.83
設問11	3.84	3.87	3.82	3.82	3.83	3.96	4.25	3.86	3.92	3.90
設問12	3.77	3.89	3.87	3.84	3.84	3.99	4.18	3.92	3.96	3.95
平均	3.66	3.73	3.71	3.78	3.72	3.86	3.97	3.75	3.87	3.79

履修者数・合格率の数値は抽選問題の関係で把握していた人文・社会分野のみ記載した。

2. 在学生調査：学生生活実態調査

文部科学省は、学生の標準的な生活状況を把握し、生活支援事業の充実を図る基礎資料を得るため、隔年で「学生生活調査」を実施していた。だが平成16（2004）年度より独立行政法人「日本学生支援機構」（JASSO）に業務を委託するとともに、国立大学の法人化に伴い、各大学も自主的に実態調査を行うことになった。鳥取大学でも教育支援委員会・学生生活課のもとに専門委員会が組織され、「学生生活実態調査」として隔年で実施されている。平成22（2010）年度版から、大学の公式HPに概要が掲載され（URL：<https://www.tottori-u.ac.jp/5889.htm>）、また平成24（2012）年度版から、受験生向け案内を意識した簡易版＝パンフレットも作成された。なお以前は書面回答であったが、現在はWeb回答となっており、回収率も減少傾向にあるが、直近の令和3（2021）年度調査では40%程度の水準を維持している。

調査の内容であるが、日本学生支援機構の学生生活調査は現在でも学生生活の実態把握を主な目的としているのに対して、本学の学生生活実態調査は、生活実態の把握とともに、早い段階から学習活動の項目も取り入れ、全学共通科目・学部専門科目に関する設問を設定している。学習活動の設問は漸次拡大しており、他の調査との境界線が曖昧になる恐れもある。

令和3（2021）年度調査では、カリキュラム関係の項目（設問13・14）として、全学共通科目・学部専門科目それぞれについて、満足・不満な科目区分は何か、満足・不満の理由は何かを質問したほか、全学共通科目・学部専門科目を通じて修得したと実感している、あるいは今後修得したいと考えているDP能力（学位授与の方針が定める、卒業までに修得すべき能力）を質問した。その概要は以下の通りである。

まず基幹科目の「人文社会」は、学生の39%が満足と回答し、満足度として最大（健康スポーツ科学実技と同率）の数値となっているが、不満な科目でも第2位の17%となっている。学部の内訳で見ると、文系の地域学部で最大の満足度、最低の不満度を記録する一方、工学部で最低の満足度、最高の不満度となっている。鳥取地区では平成29（2017）年度より選択必修が採用され、所属学部と関係なく全ての学生が4科目8単位の履修を義務付けられているため、関心・予備知識の有無によって、評価が分かれたと思われる。抽選制度の結果、関心・予備知識無き科目の不本意受講が増えれば不満も増幅するだろう。逆に基幹科目の「自然分野」は、満足度は第2位の32%、不満度も下から2位の10%であるが、学部の内訳では文系の地域学部において満足度が19%で最も低く、不満度も16%で最も高い。だが理系の米子地区でも、自然分野に関しては、不満こそ2%ながら、満足は地域学部並みの19%にとどまる。だが全体として文系科目に対する文系の満足・理系の不満、理系科目に対するその逆という傾向は、上述の授業アンケート結果と整合しない。記憶の新しいうちの科目単位の調査が実態を反映している気もするし、逆に一定期間を経た後の区分単位の振り返りこそ真実に近い可能性もある。

外国語は「英語」・「初修外国語」とも満足度は20%前後にとどまり、キャリア科目に次ぐ低さである一方、英語は不満度が全ての区分で最も高い25%に及んでいる。学部別で見ると、満足度の低迷は医学部・米子地区の低さが影響しているが、不満度の高さは鳥取地区の3学部でも均等に認められる。鳥取・米子地区の格差是正も含め、今後の改善が期待される。

「健康スポーツ科学実技」は、授業内容が学力と直結しないためか、学生の満足度は高く、全体の39%を占めて首位とほぼ同率であり、また不満も最低の5%にとどまっている。

表4：令和3（2021）年度 学生生活実態調査：集計結果（設問13・14：カリキュラム関係）

	地域学部		医学部				工学部		農学部		学部全体	
	人数	%	鳥取地区		米子地区		人数	%	人数	%	人数	%
回答者数	297	%	122	%	365	%	723	%	562	%	2069	%

①全学共通科目：満足な科目区分

入門科目	113	38%	30	25%	66	18%	278	38%	182	32%	669	32%
基幹科目：人文社会	162	55%	55	45%	103	28%	264	37%	232	41%	816	39%
基幹科目：自然分野	55	19%	43	35%	71	19%	243	34%	245	44%	657	32%
基幹科目：実験実習	10	3%	15	12%	106	29%	242	33%	137	24%	510	25%
主題科目	110	37%	55	45%	90	25%	214	30%	189	34%	658	32%
キャリア科目	40	13%	16	13%	47	13%	102	14%	83	15%	288	14%
英語	62	21%	24	20%	66	18%	169	23%	119	21%	440	21%
初修外国語	66	22%	40	33%	48	13%	131	18%	126	22%	411	20%
健康スポーツ実技	124	42%	45	37%	118	32%	295	41%	228	41%	810	39%

②全学共通科目：満足な理由

内容の興味深さ	216	73%	88	72%	215	59%	463	64%	404	72%	1386	67%
説明の分かりやすさ	81	27%	39	32%	60	16%	201	28%	154	27%	535	26%
将来への有用性	96	32%	29	24%	104	28%	201	28%	160	28%	590	29%
教員の人柄・対応	80	27%	34	28%	76	21%	150	21%	137	24%	477	23%
授業の双方向性	24	8%	6	5%	29	8%	57	8%	44	8%	160	8%
設備の充実度	10	3%	2	2%	9	2%	35	5%	26	5%	82	4%
課題の適切さ	36	12%	13	11%	31	8%	88	12%	62	11%	230	11%
成績の妥当性	50	17%	14	11%	41	11%	118	16%	86	15%	309	15%
その他	6	2%	2	2%	19	5%	35	5%	17	3%	79	4%

③全学共通科目：不満な科目区分

入門科目	43	14%	16	13%	68	19%	112	15%	99	18%	338	16%
基幹科目：人文社会	33	11%	31	25%	59	16%	133	18%	93	17%	349	17%
基幹科目：自然分野	49	16%	3	2%	40	11%	59	8%	64	11%	215	10%
基幹科目：実験実習	7	2%	1	1%	21	6%	58	8%	21	4%	108	5%
主題科目	12	4%	3	2%	26	7%	39	5%	23	4%	103	5%
キャリア科目	21	7%	12	10%	51	14%	104	14%	100	18%	288	14%
英語	77	26%	32	26%	77	21%	181	25%	149	27%	516	25%
初修外国語	62	21%	6	5%	34	9%	103	14%	60	11%	265	13%
健康スポーツ実技	14	5%	6	5%	22	6%	29	4%	23	4%	94	5%

④全学共通科目：不満な理由

内容の興味深さ	69	23%	44	36%	92	25%	200	28%	160	28%	565	27%
説明の分かりやすさ	67	23%	19	16%	53	15%	144	20%	138	25%	421	20%
将来への有用性	51	17%	20	16%	70	19%	149	21%	109	19%	399	19%
教員の人柄・対応	28	9%	11	9%	33	9%	83	11%	48	9%	203	10%
授業の双方向性	22	7%	9	7%	31	8%	56	8%	54	10%	172	8%
設備の充実度	9	3%	1	1%	17	5%	37	5%	19	3%	83	4%
課題の適切さ	38	13%	9	7%	45	12%	89	12%	48	9%	229	11%
成績の妥当性	23	8%	10	8%	18	5%	96	13%	45	8%	192	9%
その他	48	16%	15	12%	43	12%	73	10%	75	13%	254	12%

数値は該当する科目区分・理由を選択した学生の人数・割合。

	地域学部		医学部		工学部		農学部		学部全体	
回答者数	295	%	469	%	702	%	541	%	2007	%

①これまで身につけた能力

知識・理解	258	87%	428	91%	600	85%	467	86%	1753	87%
コミュニケーション能力	115	39%	137	29%	164	23%	135	25%	551	27%
数量的スキル	16	5%	25	5%	127	18%	54	10%	222	11%
情報活用スキル	53	18%	80	17%	222	32%	127	23%	482	24%
論理的思考力・創造的表現力	106	36%	126	27%	191	27%	162	30%	585	29%
問題発見・解決力	95	32%	106	23%	167	24%	139	26%	507	25%
自己管理・実行力	65	22%	96	20%	162	23%	130	24%	453	23%
生涯学習力	42	14%	51	11%	60	9%	63	12%	216	11%
協働力	48	16%	60	13%	68	10%	86	16%	262	13%
倫理観	45	15%	121	26%	84	12%	81	15%	331	16%
責任感・社会性	60	20%	91	19%	90	13%	87	16%	328	16%

②今後身につけたい能力

知識・理解	167	57%	275	58%	379	54%	286	53%	1107	55%
コミュニケーション能力	156	54%	206	44%	323	46%	265	49%	950	47%
数量的スキル	37	13%	51	11%	149	21%	117	22%	354	18%
情報活用スキル	97	33%	130	27%	208	30%	206	38%	641	32%
論理的思考力・創造的表現力	134	46%	209	44%	279	40%	241	44%	863	43%
問題発見・解決力	145	50%	206	44%	307	44%	264	49%	922	46%
自己管理・実行力	105	36%	162	34%	257	37%	193	35%	717	36%
生涯学習力	80	27%	148	31%	149	21%	153	28%	530	26%
協働力	64	22%	80	17%	117	17%	107	20%	368	18%
倫理観	47	16%	77	16%	95	14%	79	15%	298	15%
責任感・社会性	98	34%	100	21%	159	23%	126	23%	483	24%

数値は当該能力を選択した学生の人数・割合。

また DP 能力の修得については、該当する能力を全て選択してもらったところ、身に付けたと実感している能力は、「知識・理解」が 87%で最大、「論理的思考力・創造的表現力」が 29%で続くが、首位との差は 2 倍以上となっている。これに対して今後身に付けたい能力としては、やはり「知識・理解」が 55%で最大、「コミュニケーションスキル」・「問題発見・解決力」がそれぞれ 47%・46%で続くが、「論理的思考力・創造的表現力」も 43%で高い比重を占める。全体としては、いずれの能力も、既に身に付いていると考える割合より、今後身に付けたいと考える割合が高い傾向にあるが、「知識・理解」・「論理的思考力・創造的表現力」のように、既に身に付いたと実感しながらも、引き続き身に付けたいと考える能力がある一方、「数量的スキル」・「協働力」・「倫理観」のように、あまり身に付いていないことを自覚しながら、かといって今後身に付けたい訳でもない能力もある。また「倫理観」は 16%の学生が身に付いていないと回答しながら、今後身に付けたいとする学生は 15%しかいない。

3. 卒業生調査：教育力アンケート

以上は在学生へのアンケート調査であるが、これに対して卒業生への調査が教育力アンケートである。これまで平成 19 (2007) ・ 24 (2012) ・ 29 (2017) ・ 令和 2 (2020) 年度に実施され、第 1 回の調査は外部業者に委託し、第 2・3 回は基本的に教育センター（当時）を中心に、入学センター、キャリアセンターが WG を形成したが、直近の第 4 回は組織改組に伴い高等教育開発センターの所掌となった。調査対象は卒業生及びその就職先であり、卒業生については、卒業後 3 年を経過した 3 学年を対象に、本学の教育に対する満足度や学生時代に修得した能力・知識、及び社会での有用性について、また卒業生の就職先には、本学卒業生の能力や、大学時代に修得すべき能力について、質問している。回答は 4 択式（完全肯定・部分肯定・部分否定・完全否定）である。調査方法は以前は郵送方式であったが、直近では案内は郵送、回答はオンライン方式となり、卒業後の転居に伴う所在の不明や回答率の低迷が問題となっている（なお近年では、文部科学省の「成果を中心とする実績状況に基づく配分」でも卒業生・修了生への追跡調査が問われており、卒業生との連絡手段の確保が今後の課題である）。調査結果は鳥取大学の公式 HP（URL：<https://www.tottori-u.ac.jp/4060.htm>）に掲載されている。

直近の調査結果を見ると、教育・研究の 14 項目に関する卒業生の満足度に関しては、相対的に②「専門教育が充実していた」が高く、①「教養教育が充実していた」は低い。だが例外的に地域学部では教養教育が専門教育より満足度が高い。また工学部は、教養教育の満足度が 4 学部で最も低いが、工学部では全 14 項目のなかで 2 番目に高く、全 14 項目で教養教育の満足度がこれほど上位を占める学部は他に無い。全体平均でも満足度の 1 位は専門教育、2 位は教養教育となっている。在学生の授業アンケート・実態調査では理系の学部で教養教育への不満が高いのに対して、卒業生にあらためて振り返ってもらくと意外に満足度が高いという事実は、教養教育の真の価値は目先の単位修得に関心が向く在学中よりも、社会に出てからのほうが実感できることを示している。逆に医学部では③「外国語学習に積極的であった」が極端に低く、4 学部で最低、14 項目全体では下から 2 位となっていることが懸念される。これは鳥取・米子キャンパス間の語学教育の格差を示すと思われる。

また鳥取大学の学位授与の方針が定める卒業までに修得すべき能力（DP 能力）の 14 項目について、卒業生が学生時代に修得した能力（修得度）、社会に出てから役に立った能力（有用度）、学生時代に修得しておくべきであった能力（不足度）を見ると、いずれも②「専門教育の知識・理解」が高い。①「教養教育の知識・理解」の有用度も低くはないが、むしろ⑥「論理的思考力・創造的表現力」・⑦「問題発見・課題解決力」の有用性・不足度を感じている割合のほうが高い。⑬「国際化への対応力」は修得度・有用度とも 50%台にとどまり、不足度も③「コミュニケーションスキル」の 31%に続く 3 位の 28%である。以上の点は今後目指すべき教養教育の指針となりえよう。

これに対して就職先の反応を見ると、設問 6 「採用活動で重視する能力」（重要度）では、②「専門教育の知識・理解」を指摘する組織は 30%にとどまり、むしろ③「コミュニケーションスキル」を重視する組織が 73%で最大となっている。また、⑦「問題発見・課題解決力」、⑩「協働力（リーダーシップも含む）」も 40%を超える組織が重視している。設問 9 (2) 「学生時代に修得しておくべき能力」（必要度）でも、概ね同様な序列である。これに対して、①

表5：令和2（2020）年度 教育力アンケート：集計結果（抜粋）

卒業生向け設問3：鳥取大学（学部）の教育や研究について、現在どのように感じていますか。

	地域学部	医学部	工学部	農学部	全学
回答者数	83	109	139	112	443
①教養教育が充実していた	3.08	2.88	2.84	2.91	2.91
②専門教育が充実していた	3.02	3.19	2.99	3.30	3.12
③外国語学習に積極的だった	2.63	2.26	2.44	2.83	2.53
④工夫され勉強しやすいカリキュラムだった	2.84	2.67	2.58	2.65	2.67
⑤参加型・プロジェクト型の実践教育に注力	2.93	2.55	2.51	2.76	2.66
⑥少人数による指導が受けられた	3.23	2.72	2.55	3.00	2.83
⑦教員との交流が多かった	3.10	2.98	2.55	3.09	2.90
⑧学習意欲が湧く授業が多かった	2.82	2.75	2.52	2.82	2.71
⑨他学部の授業が選択できた	2.53	2.20	2.35	2.48	2.38
⑩学習面での施設・設備が充実していた	2.82	2.85	2.81	2.79	2.82
⑪著名な教授・講師が多かった	2.35	2.41	2.43	2.42	2.41
⑫学術面での研究業績が優れていた	2.61	2.64	2.63	2.77	2.66
⑬産学共同研究で実績が豊富だった	2.49	2.31	2.37	2.59	2.43
⑭研究面での施設・設備が充実していた	2.66	2.55	2.76	2.84	2.71
平均	2.79	2.64	2.59	2.80	2.70

選択肢は4種。a)完全肯定=4点、b)部分肯定=3点、c)部分否定=2点、d)完全否定=1点、として計算。

卒業生向け設問6：学生時代に修得した能力

設問7：社会に出て役立つ能力／学生時代に修得しておくべきであった能力

就職先向け設問6：採用活動で重視する能力

設問9：本学の卒業生が修得している能力／学生時代に修得しておくべき能力

	卒業生			就職先		
	433名			289組織		
	修得度	有用度	不足度	重要度	修得度	必要度
①知識・理解（教養教育）	80.1	77.9	19.0	10.7	30.4	10.4
②知識・理解（専門教育）	86.7	81.5	40.2	30.4	43.3	15.6
③コミュニケーションスキル	74.5	81.0	31.2	73.7	46.4	41.9
④数量的スキル	63.9	72.0	18.3	2.4	4.5	5.2
⑤情報活用スキル	66.6	78.3	24.6	5.2	11.4	18.0
⑥論理的思考力・創造的表現力	77.7	84.4	23.7	32.2	26.0	27.7
⑦問題発見・課題解決力	78.1	84.4	25.1	42.9	21.1	42.6
⑧自己管理・実行力	79.7	83.1	18.5	31.5	20.8	28.7
⑨生涯学習力	74.5	80.8	13.3	3.8	7.3	9.7
⑩協働力（リーダーシップ含む）	76.5	78.6	14.4	45.3	25.3	29.1
⑪倫理観	84.2	83.3	4.1	10.7	13.5	12.1
⑫責任ある市民としての社会性	74.9	79.9	4.3	5.2	13.1	6.6
⑬国際化への対応力	54.4	58.9	28.2	1.7	1.0	7.3
⑭社会参加への行動力	67.0	74.9	10.8	1.0	4.5	5.5

数値は修得度・有用度については肯定的回答率の割合、不足度・推奨度は当該能力を選択（3つまで）した割合。

「教養教育の知識・理解」の重要性・必要性を認める組織は 10%程度にとどまる。文科省・中教審はもちろん、各種の経済団体は広い教養教育の必要を唱える傾向にあり、こうした社会的な要請を踏まえて本学でも教養修得を重視する教育課程を構築し、実際に卒業生も教養教育に一定の満足度を示している訳であるが、これに対して卒業生の就職先はあまり教養を重視していないという現状をどう受け止めるべきか、吟味する必要がある。なおグローバル化を踏まえた⑬「国際化への対応力」や、最近のデータ・サイエンスと関連する⑭「数量的スキル」、⑮「社会参加への行動力」なども重要度・必要度を認める組織は多くない。

4. 学生との意見交換会

以上は基本的に書面（オンラインでの入力を含む）での調査であるが、これに対して対面・口頭でのヒアリング調査が存在する。以下、把握した概要のみ紹介する。

① 教授方法改善専門委員会：学生討論会－学生の意見が反映される大学を目指して－

平成 16（2004）年 6 月 29 日（火）16 時 45 分－18 時 30 分に共通教育棟 208 講義室（現 A20 講義室）で実施され、米子地区にも LAN 中継された。主催は当時 FD 活動を牽引していた教授方法改善専門委員会（細井由彦委員長）及び同年拡充された大学教育総合センター（清水克哉センター長）であり、本学の FD 事業が前者から後者に移行する過渡期であったことを示している。参加者数は学生 131 名（鳥取 110・米子 21）、教員 30 名、職員 13 名の合計 174 名であった。討論内容は「授業評価・シラバスについて」、「定期試験、成績評価（GPA）について」、「全学共通教育について」（大学入門科目・主題科目・実践科目・専門基礎科目）、「専門科目について」、「その他」となっている。討論の概要は『広報誌アゴラ』No.19（2004 年 11 月）に掲載され、『わかりやすい講義をめざして』（7）（2005 年 3 月）にも再録されている。

② 大学教育総合センター・高等教育開発部門：新入生と学長との懇談会

平成 18（2006）年 5 月 23 日（水）16 時 30 分－18 時 10 分に共通教育棟 208 講義室で実施された。上述の学生討論会を継承する企画であるが、対象学生は主に新入生となったほか、扱う内容も教育活動の枠組を超えて、授業科目、学生生活、施設・設備、課外活動、入学試験など、多岐にわたるようになった。参加学生の人数は、初回 163 名、H19：200 名、H20：300 名、H21：250 名、H22：240 名、H23：250 名（初回以外は概数）となっている。なお討論の概要は『わかりやすい講義をめざして』（9）－（14）（2007 年 3 月－2012 年 3 月）に毎年掲載された。2007 年度をもってそれまで本学の FD 事業を牽引してきた教授方法改善専門委員会は解散し、その役割を本務として継承する大学教育総合センター・教育開発部門が学長との懇談会も主催するようになったが、学長との懇談会は平成 23（2011）年度をもって終了している。

③ 教養教育センター・共通教育部門：主題科目「鳥取を知る」での意見交換

全学規模での懇談に代わり、教育センター・共通教育開発部門（当時）が企画・運営する全学共通科目の一部が、学長との意見交換に当てられるようになった。その母体は平成 21（2009）年度のカリキュラム改革で導入された特定科目「鳥取大学学：知の最前線」（前期集中講義）であり、学長・理事や各学部長が毎週交代で講師を務めながら、本学の教育・研究活動を紹介するオムニバス授業であった。なお姉妹関係の「鳥取学：とっとり再発見」（後期月 2）は、学外講師のオムニバス方式で、鳥取の文化・歴史・自然・産業・行政を取り上げるものであつ

た。平成 27 (2015) 年度に特定科目が廃止され、前者は主題科目「鳥取大学を知る」(前期木 1) に再編されたが、過去のシラバスを確認する限り、平成 28 (2016) 年度から第 15 回に学長との意見交換が設定されている。さらに令和 2 (2020) 年度には「鳥取学」と統合して主題科目「鳥取を知る」(後期月 2) となり、鳥取大学・鳥取の話題が半分ずつ占めるようになったが、現在も最終回における学長との意見交換は継続している。だが時間割り配当は人文・社会分野の選択必修科目と同じ月曜 2 限であるため、受講者数は絶対的に少なく、学生全体の利害を代弁するものであるのか不安が残るほか、当該授業の感想も受け付けるため、論点は拡散している印象がある。また概要が公的な記録として共有されることはなくなった。

④ 高等教育開発センター：学生との意見交換会

令和 4 (2022) 年度から、並行して「高等教育開発センター」のもとでも、前期・後期それぞれ「学生との意見交換会」が始まった。その詳細はいずれ担当者の分析に委ねたいが、かつて実施されていた全学的な教育改善の試みに復帰する企画と位置付けうる。この試みを継続するには、先行企画が頓挫した背景を分析し、再度の中座を回避するとともに、並行する教養教育センター主催の学長との意見交換との位置関係を調整する必要があるだろう。

5. 全学共通教育カリキュラム調査

教養教育センターは、その前身時代において、全学共通教育のカリキュラム改革に必要な基礎資料を収集するため、あるいはカリキュラム改革の成果を検証するため、何度か単発のカリキュラム調査を実施してきた。その時々で目的・方法も異なるが、概要を紹介しておきたい。

① 2011 年度全学共通科目アンケート調査

2009 年度のカリキュラム改革(基幹科目の導入)の成果・課題を検証するため、教育センター教育開発部門・教職教育部門のもとで、2011 年度にアンケート調査が実施され、2012 年度に調査報告がまとめられた。調査対象は、旧カリキュラムを履修した 2008 年度入学生(調査時 2011 年の 4 年生)、及び新カリキュラムを履修した 2009-11 年度入学生(調査時 2011 年の 3-1 年生)であり、新旧カリキュラムで調査結果に違いがでるか、検証できるようにした。あわせて現場で授業を担当している教員にもアンケート調査を行い、カリキュラム改革の効果・問題を学生・教員の双方の立場から多角的に分析することに努めた。全体として、地域学部では新旧課程の満足度に明瞭な違いがない反面、理系学部では旧課程に対する新課程の満足度の優位が認められ、基本的に理系の学生のための改革であった印象がある。また教員の間では、オムニバス授業など体系性を欠く授業科目への疑問が多く示され、その見直しが課題となった。

なお学生に学びたい学問分野を質問し、該当する分野を無制限に選んでもらったところ、「心理学」(回答者の 43%が選択)が突出していたことを指摘しておこう。今でも心理学の受講希望は圧倒的に高いが、この傾向は 10 年前から変わっていない。ちなみに教員で最も高かったのは「外国語」(回答者の 64%)、次が「哲学」・「倫理学」(それぞれ 50%)であった。ちなみに自分の専門分野である「外国史」は最下位なので、積極的な受講は期待できないほか、他の科目の抽選にはずれた不本意受講も多く、授業アンケートの低迷の一因である(と言いたいところだが、同じく人気度の低い「日本文学」・「外国文学」は授業アンケートが高い)。

表6：教養教育として学びたい分野・学んでほしい分野

肯定回答率 (%)

	哲学	倫理学	現代思想	教育学	心理学	芸術学	日本文学	外国文学	言語学	外国語	法学	政治学	社会学	経済学	経営学	日本史	外国史	地理学	数学	統計学	物理学	化学	生物学	地学	情報科学	健康スポ
学生	20	14	12	16	43	17	9	7	10	25	11	14	16	26	15	11	7	10	13	10	11	13	17	9	14	24
教員	50	50	35	9	31	23	24	21	13	64	31	22	35	39	18	38	31	14	35	35	27	23	31	13	37	23

学生（2,584名）には学びたい分野を、教員（141名）には学生に学んでほしい分野を無制限に選択してもらった。

② 2018年度全学共通科目アンケート調査

2017年度のカリキュラム改革（人文社会の選択必修化）の成果を検証するため、前述の「学生生活実態調査」に便乗し、その追加項目としてカリキュラム改革に関する設問を入れた。調査対象の2015・16年度入学生（調査時の4・3年生）は旧カリキュラム履修者、また2017・18年度入学生（調査時の2・1年生）は新カリキュラム履修者であり、両者の満足度に違いが出るかが焦点であった。全体として、内容・水準については果たして満足度の上昇があるのか無いか微妙な反面、選択方法・抽選制度など事務手続きについては不満度の増大が明瞭で、その早急な改善の必要が明らかとなった（概要は、拙稿「平成29年度全学共通科目カリキュラム改革の成果と課題——人文・社会分野における選択必修の意義——」『大学教育研究年報』第24号2019年3月）。抽選制度の問題は、2019年度から工学部にも選択必修が適用されて顕在化した訳ではなく、それ以前の開始2年目にして早くも露呈していたのである。

2011年度調査であれ、2018年度調査であれ、アンケート調査の結果、一部の授業科目への人気が高いこと、抽選制度への不満が多いことが既に判明していたにもかかわらず、現在でも同様の不満が現れていることは、この間これらの問題が放置されていたことを意味する。

③ 全学共通科目満足度調査

新たに令和4（2022）年度から教養教育センターの満足度調査が実施される。上記のアンケートがいずれもカリキュラム改革の成果を検証するための単発事業であったのに対して、新たな満足度調査は毎年継続的に実施する点で大きく異なる。その詳細はやはり担当者の分析に委ねたいが、オンライン回答のため回答率の向上を工夫する必要があるほか、意見を求めた以上は、確認した不満を放置せず、実際の改善に反映させてゆくことが課題であろう。

6. 米子地区調査

ここで米子地区の全学共通科目調査に触れておきたい。この調査は教育センター（当時）を中心とする本学の組織的な教育調査であるが、その趣旨・形態から2期に分けられる。

① 第I期：米子地区6年一貫教育の試行調査

鳥取大学ではかつて全学部の1・2年生が教養部に所属し、湖山地区で2年間の教養課程を修めた。だが平成7（1995）年の教養部廃止によって、医学部は湖山地区での教養課程を1年間に短縮し、2年生から米子地区での専門課程を履修した。さらに平成20（2008）年、医学科は、教養・専門課程とも1年生から米子地区で一貫して履修する体制の「試行」を開始し、条件と

して教育センター・共通教育開発部門（当時）が状況を毎年調査することになった。

調査対象は医学科の1-3年生、調査内容は教養・専門課程を含む学習面、課外活動を含む生活面にわたり、選択式・記述式のアンケートと、無作為に抽出した学生へのヒアリングが行われた。個別の科目区分を単位に5段階で満足度を問い、不満度が高いものはその改善を学部に提案したが、この結果、翌年の調査では改善が認められるものもあった。その意味で試行調査の性格は、試行の実態を把握して本格移転の可否を判定するというよりは、試行の弊害を解消して将来の本格移転を準備するという性格が強かったように思う。最終設問では自身の受けた教養教育の全体的な満足度を問うたが、平成21（2009）年の第1回調査では米子地区1期生の2008年度入学生が最も低い3.22、逆に湖山地区最終世代の3年生（当時）＝2007年度入学生が最も高い4.08の平均値を記録し、後者の数値はその後4年間にわたり破られなかった。

なお平成23・24（2011・12）年度の調査では、改善の参考として、学びたい学問領域を問う設問も加えた。その結果は以下の通りであるが、湖山地区と同じく「心理学」が全ての学年で人文社会の首位にあり、「哲学」・「倫理学」が続く。この点で湖山地区から哲学教員を派遣する意味はあると思うが、逆に人気の低い「芸術学」の教員に5年（2015-19年）も派遣を求め続けたことには疑問が残る。人員派遣（あるいはオンデマンド授業提供）において学生の希

表7：2009-13年度 米子地区アンケート調査（最終設問＝満足度の推移）

	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年
3年生	4.08	3.75	3.63	3.69	3.52
2年生	3.22	3.44	3.71	3.79	3.61
1年生	3.66	3.62	3.64	3.80	4.30

①大変満足＝5点、②やや満足＝4点、③中立＝3点、④やや不満＝2点、⑤大変不満＝1点、として計算。

表8：教養教育として学びたい分野

肯定回答数（人）

	哲学	倫理学	現代思想	教育学	心理学	芸術学	日本文学	外国文学	言語学	外国語	法学	政治学	社会学	経済学	経営学	日本史	外国史	地理学	数学	統計学	物理学	化学	生物学	地学	情報科学	健康スポ
--	----	-----	------	-----	-----	-----	------	------	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	----	-----	----	------	------

平成23（2011）年度：1年生73名・2年生86名・3年生42名＝合計201名

1年	26	27	16	11	46	8	12	11	17	35	24	23	13	17	15	4	9	9	14	9	12	13	23	5	13	38
2年	30	18	12	11	32	10	10	14	15	24	16	20	10	22	30	9	12	10	6	11	10	12	12	1	17	33
3年	13	4	4	5	11	6	5	4	5	5	10	10	6	12	6	5	6	4	3	4	4	3	4	0	3	11
計	69	49	32	27	89	24	27	29	37	64	50	53	29	51	51	18	27	23	23	24	26	28	39	6	33	82

平成24（2012）年度：1年生32名・2年生60名・3年生33名＝合計125名

1年	13	11	8	8	22	9	14	12	5	12	7	9	5	8	6	12	10	4	4	3	5	5	7	3	3	14
2年	15	10	8	6	18	4	8	12	5	29	11	10	6	13	20	4	3	3	10	7	4	6	11	3	6	25
3年	16	9	8	6	15	4	4	6	9	13	6	8	5	12	7	4	5	6	4	11	3	3	6	5	6	13
計	44	30	24	20	55	17	26	30	19	54	24	27	16	33	33	20	18	13	18	21	12	14	24	11	15	52

望に迎合する必要はないが、あえて人気が高い授業を開設する場合にはカリキュラム上の必要性について根拠付けする必要がある。ちなみに筆者の専門分野である「外国史」の人気は最低ランクなので、あえて米子地区の開設科目として提供する優先性は低いと考えている。

② 第Ⅱ期：米子地区の全学共通教育調査

1期生が最終学年に達した試行6年目の平成25（2013）年度に、米子・湖山地区とも執行部が交代する一方、同年の第5回調査では6期生の1年生（当時）＝2013年度入学生において、湖山世代の数値を更新する4.30の平均値を記録した。以後、医学科の6年一貫教育は暫定措置から本格実施へと移行し、教育センターの試行調査も本来の役割を終えた。ところで旧執行部は、米子地区が独力で教養教育を遂行できるのか見極めるため、湖山地区の支援をあえて控えていたが、今や本格実施を決定した新執行部は、むしろ米子地区の教養教育を充実するため、今後は湖山地区も協力することを確認するに至った。このため教育センターの米子調査も、湖山・米子地区の全学共通教育における質的な一元性の保証を目的として存続することになった。

以後、調査項目から教養教育以外の専門課程や、教育以外の課外活動など生活関連が消える一方、調査頻度は前期・後期の2回に拡大され、また対象は生命科学・保健の2学科にも拡大された。この2学科は1年次に湖山地区の教養教育を経験しているため、両キャンパスの教育格差を測る上で有効と思われた。また調査目的として授業改善の性格が強まったことから、湖山地区の授業アンケートとリンクさせる可能性もあったと思われるが、対象科目は限定的で、設問の内容や選択肢の種類（4択）は湖山地区の授業アンケートと互換性がなく、実現していない。また調査結果は各選択肢の割合（整数）を開示するにとどまっているので、科目間・設問間・年度間の比較ができず、このためどの科目を、どのような観点で改善すべきか検討したり、前年と比べて改善の効果があつたかどうか検証することが困難になっている。

そこでひとまず令和3（2021）年度について科目区分の小計を出し、選択肢の分布から実数を逆算して平均を求めてみた。すると医学科31科目の場合、後期（3.73）に比して前期（3.46）が低く、なかでも「自然分野」が前期・後期を通じて最も低い（3.21：なお最低2.98～最高3.32）、その要因は設問2「授業方法は分かりやすいか」（平均3.16）にある。人文社会は前期に対する後期の高さが明らかで、湖山地区の教員派遣が功を奏している。外国語は「英語」・「初修外国語」とも区分単位の平均では3.70前後で大差ないが、科目単位の平均では最低3.58～最高3.98の格差がある。ところで湖山地区の平均値は、自由選択の「初修外国語」、選択必修の「基幹科目」、必修の「英語」の順に低くなるのに対し、米子地区では前期を除き大差はなく、基幹科目・初修外国語は英語と同等の水準にあると予想される。

他方、生命科学・保健学科の場合、既に湖山地区で人文・社会分野を修得済みのため、「英語」（総合英語Ⅰ・Ⅱ）が全学共通科目の中心となる。1年次の湖山地区での教育と2年次の米子地区での教育のギャップを検証する設問3「授業のつながりはスムーズか」を設定したため設問数は1つ多く、単純に比較できないが、平均は医学科より低い。その原因は設問3にあり、なかでも前期の生命科学科で最低値（平均3.18）を示している。この2学科は、上述した通り湖山地区では4学部のなかで授業アンケートの平均が最も高いが、逆に米子地区の英語では医学科より平均が低い。この事実は、学科による学力の違いを示すのか、キャンパスによる教育水準の違いを意味するのか、見極めながら対応する必要がある。

表 9 : 令和 3 (2021) 年度 米子地区アンケート調査

①医学科

前期	人文社会	自然分野	主題科目	コミ英A	医療英 I	初外語 I	合計平均
対象科目	2	4	1	3	3	4	17
回答者数	22	302	26	99	98	101	648
1: 内容・水準は充実しているか	3.37	3.25	3.73	3.75	3.77	3.77	3.51
2: 授業方法は分かりやすいか	3.43	3.16	3.70	3.68	3.70	3.73	3.44
3: あなたは真剣に取り組んだか	3.32	3.25	3.59	3.70	3.63	3.73	3.46
4: あなたは全体として満足したか	3.32	3.16	3.67	3.74	3.68	3.74	3.44
平均	3.36	3.21	3.67	3.72	3.69	3.74	3.46

後期	人文社会	自然分野	主題科目	コミ英B	医療英 II	初外語 II	合計平均
対象科目	3		1	3	3	4	14
回答者数	82		26	99	97	96	400
1: 内容・水準は充実しているか	3.73		3.88	3.76	3.78	3.70	3.75
2: 授業方法は分かりやすいか	3.73		3.88	3.77	3.70	3.71	3.74
3: あなたは真剣に取り組んだか	3.71		3.81	3.68	3.64	3.69	3.69
4: あなたは全体として満足したか	3.70		3.88	3.74	3.73	3.71	3.73
平均	3.72		3.86	3.74	3.71	3.70	3.73

②生命科学・保健学科

期別	前期				後期		
	生命		保健	合計 平均	生命	保健	合計 平均
学科	医学英 I	総合英 I	総合英 I		総合英 II	総合英 II	
対象科目	医学英 I	総合英 I	総合英 I	平均	総合英 II	総合英 II	平均
回答者数	38	33	116	187	16	92	108
1: 内容・水準は充実しているか	3.67	3.79	3.68	3.70	3.69	3.63	3.64
2: 授業方法は分かりやすいか	3.74	3.55	3.70	3.68	3.69	3.65	3.66
3: 湖山地区での授業とのつながり	3.26	3.18	3.32	3.28	3.31	3.44	3.42
4: あなたは真剣に取り組んだか	3.82	3.64	3.70	3.71	3.75	3.65	3.67
5: あなたは全体として満足したか	3.82	3.67	3.65	3.69	3.69	3.59	3.61
平均	3.66	3.57	3.61	3.61	3.63	3.59	3.60

選択肢は 4 種。a) 完全肯定=4 点、b) 部分肯定=3 点、c) 部分否定=2 点、d) 完全否定=1 点、として計算。

いずれにせよ、過去の年度についてもこうした分析を行えば、平均値の推移から改善の進捗状況を客観的に検証できよう。だが今後は米子地区でも湖山地区の授業アンケートを実施することが検討されており、また 2022 年度から高等教育開発センターが前期・後期の「学生との意見交換会」を開始し、医学部も対象としている以上、教養教育センターが共通教育部門を中心として独自に調査を継続する意義は何なのか、検討する必要があるだろう。

7. 文部科学省：「全国学生調査」

以上は鳥取大学が実施している調査であるが、文部科学省が全国的に実施している調査として「全国学生調査」があり、令和 3 年度に第 2 回の試行調査が行われた。その背景には、中央教育審議会の答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」（平成 30 年 11 月 26 日）が、各大学の情報公表とともに、国による同様な情報公表を提言したことがあるが、続く「教

表 10：令和 3（2021）年度 文部科学省・全国学生調査：集計結果（問 1・3 のみ抜粋）

学部・学科	地域学部		生命・保健		医学科		工学部		農学部		共同獣医		本学	国立	全国
	2年	4年	2年	4年	2年	4年	2年	4年	2年	4年	2年	6年	合計	平均	平均
在籍者数	181	198	162	172	114	107	467	547	218	237	41	33	2,477	181,762	949,482
回答者数	17	14	23	20	22	19	25	33	21	21	5	0	220	28,023	112,341
回答率 (%)	9.4	7.1	14.2	11.6	19.3	17.8	5.4	6.0	9.6	8.9	12.2	0.0	8.9	15.4	11.8

問 1 「大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか」

①授業内容の意義や必要性の説明	3.18	3.00	3.17	3.10	3.23	2.63	3.16	3.18	3.33	3.10	3.20		3.12	3.12	3.16
②学びたいという意欲がわく内容	3.00	3.21	3.26	3.20	3.18	2.42	3.20	3.12	3.33	3.10	3.40		3.12	3.12	3.15
③理解しやすいように教え方が工夫	2.88	3.00	3.04	3.05	3.00	2.58	3.04	3.06	3.29	3.00	3.40		3.01	3.04	3.09
④予習・復習などの自主学習の指示	2.94	2.71	3.04	2.95	2.68	2.32	3.04	2.88	3.19	2.86	2.60		2.87	2.95	3.04
⑤教員以外のアシスタントの配置	1.65	1.71	2.70	2.85	2.55	2.00	2.68	3.15	2.86	2.24	2.80		2.53	2.52	2.50
⑥小テストやレポートなどの課題	3.53	3.29	3.39	3.35	3.41	2.79	3.92	3.58	3.86	3.52	3.80		3.50	3.53	3.52
⑦提出物に対するコメント付き返却	2.12	2.00	2.26	2.50	1.91	1.84	2.20	2.48	2.14	2.10	2.80		2.20	2.33	2.44
⑧グループワークやディスカッション	2.82	3.00	2.52	3.25	2.95	2.68	2.12	2.61	2.52	2.38	3.20		2.67	2.69	2.80
⑨教員に意見を求められるなど質疑応答	3.12	2.36	2.74	3.10	2.64	2.47	2.84	2.79	2.52	2.48	2.80		2.72	2.66	2.75
⑩語学以外でも主に英語で行われる授業	1.76	1.57	1.35	1.40	1.77	1.89	1.68	2.00	1.52	1.95	1.20		1.70	1.78	1.75

問 3 「大学教育を通じて、次のような知識や能力が身に付いたと思いますか」

①専門分野の知識・理解	2.94	3.00	3.00	3.40	3.18	2.89	2.88	3.12	3.10	3.00	3.40		3.06	3.11	3.12
②将来の仕事につながる知識・技能	2.71	2.79	3.09	3.40	3.18	3.11	2.60	2.97	2.86	2.90	2.80		2.96	2.93	2.99
③文献・資料を収集・分析する力	3.00	3.14	2.83	2.75	2.73	2.68	2.92	3.15	3.05	3.19	3.20		2.95	3.03	3.01
④論理的に文章を書く力	2.76	2.71	2.70	2.80	2.59	2.42	2.76	2.91	2.95	2.90	3.20		2.77	2.92	2.90
⑤人に分かりやすく話す力	2.71	2.86	2.61	2.50	2.50	2.53	2.52	2.73	2.90	2.95	3.00		2.68	2.80	2.83
⑥外国語を運用する力	2.18	2.00	1.91	2.00	1.91	1.63	2.28	2.09	2.24	2.62	1.40		2.08	2.13	2.06
⑦統計・データベースの知識・技能	2.18	2.21	2.13	2.65	2.36	1.79	2.76	2.88	2.81	2.76	2.60		2.50	2.55	2.47
⑧問題を見つけて解決方法を考える力	2.82	2.86	2.61	2.85	2.59	2.37	2.88	2.97	2.90	2.95	2.60		2.79	2.92	2.92
⑨答えのない問題を自分で考え抜く力	2.76	2.93	2.78	2.80	2.50	2.32	2.84	2.79	2.76	2.95	2.60		2.74	2.90	2.90
⑩多様な人々の理解を得つつ協働する力	3.06	3.29	2.83	3.00	2.91	2.74	2.88	2.79	3.24	3.10	2.80		2.95	2.92	2.98
⑪幅広い知識、ものの見方	3.18	3.21	2.96	3.00	2.82	2.58	2.88	2.91	3.05	3.29	2.60		2.96	3.07	3.09
⑫異なる文化に関する知識・理解	2.94	3.07	2.65	2.45	2.27	2.05	2.52	2.58	2.81	3.05	1.80		2.60	2.77	2.77

選択肢は 4 種。完全肯定＝4 点、部分肯定＝3 点、部分否定＝2 点、完全否定＝1 点、として算出されている。

学マネジメント指針」(令和2年2月22日)も、伝統的な偏差値に代わる社会的な大学評価の手段として教育成果の情報公開を提唱している。まだ試行段階であるが、全国の国立・公立・私立大学における2・4年生(あるいは6年生)を対象に、平成元年から隔年で過去2回実施され、結果は文部科学省のHPで公表されている。Web回答のため、全体で11.8%、国立大学でも15.4%にとどまるが、本学ではわずか8.9%である。このためどれだけ全体像を反映するのか疑問は残るが、意識の高い学生の見方を示すものとして留意する価値はあろう。設問は教員の授業方法、大学の教育体制、学生の学習内容、学習姿勢、生活時間など多岐にわたる。

問1は授業方法に関するもので、①意義の説明、②意欲わく内容、③教え方の工夫、④自習方法の指示、⑤アシスタントの配置、⑥課題の提示、⑦コメント付き返却、⑧アクティブラーニング、⑨質疑応答の機会、⑩英語媒体の授業、が問われている。本学の平均は、教員の教授技術に関する項目よりも、教員・学生の向き合い方に関わる項目で低い。だがこうした傾向は既に本学独自の各種調査でもある程度判明していたことであって、むしろ今回の全国調査で注目すべきは、上記一連のガラパゴス的な学内調査と異なり、各項目の全国ランキングにおける本学の位置が判明することである。各項目での本学の番付を見ると、まずほとんどの項目で全国平均より国立大学の平均が低いのだが、その国立大学の平均よりも本学の平均は低い。なかでも④自主学習の指示、⑦コメント付き返却が弱い。例外的に、⑤アシスタントの配置、⑨質疑応答は、国立大学の平均を上回るが、うち全国平均も上回るのは前者のみである。教員一人当たり学生数が少ない地方国立大学に本来有利な学生サービスにおいて、本学の平均が都市部の大規模校を含む全国平均より低いことは、まだ試行段階とはいえ、この調査が今後もし偏差値に代わる新たな評価指標として活用されるなら、憂慮すべき事態と言えよう。

問3は修得した能力を問うものであるが、専門教育に関する項目としては、①専門分野の知識・理解、②将来の仕事につながる知識・技能が、また教養教育に関わる項目として、⑥外国語の運用能力、⑦統計分析やデータ・サイエンスの知識・技能、⑪幅広い知識・ものの見方、⑫異なる文化に関する知識・理解が、他に学習技法に関する項目として、③文献・資料収集、④文章作成、⑤プレゼンテーション、⑧問題発見、⑨問題解決、⑩協働が設定されている。鳥取大学の回答は、ここでもほぼ全ての項目で全国平均及び国立大学の平均を下回り、なかでも⑥外国語の運用能力(2.08)、⑦統計・DSの技能(2.50)、⑫異文化理解(2.60)、⑤分かりやすく話す力(2.68)が低い。例外として、項目②「専門知識・技能」(本学平均2.96>国立平均2.93)及び項目⑩「協働力」(平均2.95>国立平均2.92)が国立大学の平均をわずかに上回り、本学の実学志向、実験実習の充実を反映するが、それでも実学志向の私立単科大学も含む全国平均(それぞれ2.99・2.98)に比べれば低くなっている。

8. 全学共通科目の自己点検・調査

以上は全学共通科目を履修する学生への調査であったが、全学共通科目の教育課程・開設計画を策定する大学・教員への調査として、自己点検・評価がある。専門科目(学位プログラム)については既に2018年度から開始され、2020年度からは高等教育開発センターが担当しているが、2021年度には全学共通科目についても教養教育センターによって実施された。

その詳細は本誌掲載の別稿を参照されたいが、①教育課程を編成する4学部、②開設計画を

立案する 17 教科集団、③全学共通教育を企画・運営する教養教育センターに対して点検作業を依頼し、その結果を教養教育センターで判定した。全体として、①学部レベルでは、専門課程の関係で全学共通科目のための時間割り上の曜日時限あるいは卒業要件における履修単位を十分確保できないこと、②教科集団レベルでは、登録状況の開示の遅延によって学生の受講希望に対応した開設計画の準備が阻害されていること、教科集団の教員編成によっては学部業務との兼ね合いから全学共通科目の担当が逼迫していること、等々が判明している。これらの点は学生への調査から判明している過密な時間割りや抽選漏れへの不満と符合するが、学生の不満と教員の都合をいかに調停するか、今後の課題としてあらためて確認された。

おわりに

以上の各種調査はそれぞれ目的・対象・内容・主体が異なるため、概要の整理は容易でなく、また経年で判断すべきものもあるが、さしあたり以下の点は確認できるように思われる。

第一にアンケート調査自体の問題としては、実施側・回答側双方の負担を考えれば、趣旨・内容・対象が重複する調査は整序・精選していくことが必要であろう。アンケート調査の群雄割拠状態は学生のアンケート疲れによって正確な回答を阻害し、回答率の低下にもつながる。あわせて、頻度・種類を整序する必要と関連するが、調査結果は速やかに分析・公表し、可能な限り改善に反映させることが必要であろう。個々の授業科目の内容・方法に関する即座の改善は困難にしても、現在問題となっている抽選制度の問題や、特定の科目に対する履修希望の偏向は 10 年以上の調査でも既に判明していたことである。調査結果の放置は、アンケート調査への信頼の低下、これによる回答率の低下という悪循環を招きかねない。

第二に授業アンケートの結果を見る限り（学生生活実態調査の結果との整合性の問題は残るものの）、人文社会に対する理系学生の不満、自然分野に対する文系学生の不満は必ずしも高くなく、所属に関わらず全ての学生が履修する基幹科目はひとまず順調に機能していると言えよう。むしろ学部によっては、授業科目が文系であれ理系であれ満足度（及び合格率）が一律に低く、こうなるともはや問題は教員サイドの授業内容・説明方法よりも、学生自身の取組姿勢・学修活動にある気がしてくる。文科省の全国学生調査でも、純粋な講義技法よりも教員・学生との対話（自習指示・コメント付き返却）が課題となっており、その意味では、既に一定の改善を見ている伝統的な A 群の設問よりも、導入されながらも今一つ学習改善に帰結していない B 群のあり方が今後の一つの鍵になるかもしれない。

第三に各種アンケートのなかでも本学の学生生活実態調査や教育力アンケート、あるいは文科省の全国学生調査など、修得した能力を問うタイプの調査を見る限り、本学では語学力を筆頭に、「論理的思考」・「問題発見・解決力」などの思考力や、統計処理・プレゼンテーションなどの技法で不足が感じられる。だが現行カリキュラムでも、語学はもちろん、組織改組を伴う DS 関連科目の開設や、教養教育センターの企画・運営する「教養ゼミナール」など、不足する能力の育成に対応する枠組は既に存在する以上、問題はカリキュラム自体の再編や新規科目の準備といった大がかりな改革ではなく、むしろ既存科目の地道な質的充実であろう。

今後いかなる方向で改革するにせよ、その遂行には、現行の全学共通科目のいかなる点に、いかなる根拠で、問題の存在を認めるのか、全学的な共通認識を得ることが必要だろう。